HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	［展示］「台湾に渡った北大卒業生たち」第I期・第II期・第III期
Citation	北海道大学大学文書館年報, 7, 59-92
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49411
Type	other
File Information	ARHUA7_004.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

＜展　示＞

「台湾に渡った北大卒業生たち」第Ⅰ期・第Ⅱ期・第Ⅲ期

1．展示の企画

札幌農学校・東北帝国大学農科大学・北海道帝国大学農学部は、日本が台湾を領有した1895年から終戦までの半世紀にかけて、多くの卒業生を台湾に送り続けた。渡台した卒業生たちは、台湾総督府・製糖会社の技師や台北帝国大学等の教官として、台湾に対する日本の植民地経営の技術的・学術的な担い手となった。

2010年度、大学文書館では、台湾と北海道大学との歴史的なつながりを再考察するため、戦前期に台湾に渡った札幌農学校～北海道帝国大学卒業生に関する調査研究を行った。財団法人北海道大学クラーク記念財団新渡戸基金研究助成の交付を受け、2010年12月13～18日には台湾に赴き、国立台湾大学図書館・校史館、国史館台湾文献館等において現地資料調査を行った。本展示は、その調査研究の成果の一部として、企画したものである。

展示区分は、渡台した卒業生の専攻分野に着目して、第Ⅰ期「統治・経営と農業経済学」、第Ⅱ期「生産・技術と植物学・農学」、第Ⅲ期「産業化と農芸化学、そして台北帝国大学」と３期に分けた。展示構成は、資料陳列とパネル掲示とした。陳列資料は、卒業生１名につき２点（渡台前の資料、渡台後の資料）、展示ケース２台におさめた。掲示パネルは、各期において、①展示挨拶パネル１枚（Ａ１判）、②展示概要解説パネル１枚（同）、③人物紹介パネル（渡台した卒業生から専攻分野別に８名を選出し、肖像写真・略歴・人物解説をＡ３判にまとめたもの）、④回想パネル（Ａ３判）、⑤補足パネル（写真・絵葉書・リスト等）で構成した。

また、第Ⅱ期の展示では、国立台湾博物館の基礎を築き、植物学研究でも大きな功績を残した川上瀧彌（札幌農学校第18期生）を特集した。特集展示は、第Ⅱ期展示の向い側に設け、展示ケース２台に資料18点（渡台前・渡台後の資料各９点）を陳列し、パネル展示を行った。

2．展示の場所・期間・風景

展示場所は、展示会場として従来利用している附属図書館２階の正面玄関ロビーが改修工事中のため、附属図書館４階北方資料室の前室（テラス）を使用した。展示期間は、４階が改修工事のために閉鎖となる直前の2011年１月から６月までの約半年とした。

⑴　第Ⅰ期展示の開催期間：2011年１月20日～2011年３月20日

⑵　第Ⅱ期展示の開催期間：2011年３月25日～2011年５月20日

⑶ 「《特集》川上瀧彌」展示の開催期間：2011年４月11日～2011年５月20日
⑷ 第Ⅲ期展示の開催期間：2011年５月24日～2011年６月10日

展示全景（第Ⅰ期）

資料陳列（第Ⅱ期）

３．展示挨拶・概要解説パネル

３－１．展示挨拶パネル

大学文書館第１回企画展示

台湾に渡った北大卒業生たち

戦前、多くの北大卒業生が台湾に渡り、日本の植民地統治に深く関わりました。例えば、札幌農学校第２期生で教授も務めた新渡戸稲造が、台湾総督府殖産局長心得として台湾製糖業振興を主導し、日本の台湾経営の基盤形成に大きな役割を果たしたことはよく知られています。

しかし、新渡戸のように幹部として台湾植民地政策に直接関与した例は稀で、多くは台湾総督府の農政実務担当者、農事試験場技師、台北帝国大学等の教員として植民地統治を下支えする役回りを担いました。彼らのもたらした技術や学術は、あくまで植民地統治を第一義的な目的としていました。その一方で、技術・学術が有する普遍的価値ゆえに、台湾の人々がその成果を取り込んで、台湾の社会・産業・文化の形成に役立てたという側面も見られます。

この企画展示では、台湾に渡った北大卒業生たちの人物と活動を紹介し、彼らの担った歴史的役割の多面性を考えます。展示は３回に分けて行ないます。各回の中心テーマは、⑴統治・経営と農業経済学、⑵生産・技術と植物学・農学、⑶産業化と農芸化学、そして台北帝国大学です。

展示を通じ、北海道大学の歴史、そして台湾に対して、新たな関心を向けていただければと思います。

3－2．展示第Ⅰ期の概要解説パネル

Ⅰ．統治・経営と農業経済学

⑴　北海道殖民から台湾統治・経営へ――初期渡台者――

1895年、日本は台湾植民地統治を開始し、台湾総督府を設置した。総督府は、北海道殖民事業を担った北海道庁技師を採用し、その経験を新たな植民地である台湾の殖民・殖産事業に活かそうとした。横山壮次郎（地質）、柳本通義（殖民）、十川嘉太郎（土木）ら、初期渡台者たちである。

しかし、気候・地形や先住民族の存在のため、藤根吉春（畜産）が回想するように、台湾では北海道と同様な殖民事業を展開することはできなかった。彼らは専門分野とは別に、柳本が樟脳産業、横山が殖産農政実務と製糖業、藤根が農事試験場の事業を担当することとなった。

⑵　農業経済学を学んだ卒業生たち

1901年に植民政策専門家として台湾総督府から招聘を受けた新渡戸稲造は、台湾製糖業の将来性の高さを指摘し、その振興策に先鞭を付けた。

次いで、1906～08年、農業経済学を学んだ卒業生が台湾総督府に赴任し、殖産・農政実務の中心は横山ら初期渡台者から彼らに移った。中央の実務を担った長崎常と小川運平（札幌農学校第16期生）、植民政策理論家の東郷實、地方庁の農政実務を担当した色部米作である。台湾総督府は、殖産・農政の立案・実施に際して、農業経済学の学識に期待したのである。彼ら以降に渡台する農業経済学科卒業生は、製糖会社や拓殖会社へ就職していく。

3－3．展示第Ⅱ期の概要パネル

Ⅱ．生産・技術と植物学・農学

⑴　生産性向上の研究――農学・園芸学・畜産学――

台湾総督府は、農事試験場・糖業試験場・園芸試験場・種畜場など農業振興に関わる調査・研究を行なう研究施設を設置した。それぞれの分野の技師には北大出身者を重用した。

各研究施設では、金子昌太郎（甘蔗）、井街顕・磯永吉（米）、芳賀鍬五郎・桜井芳次郎（果樹）、山田秀雄・谷村愛之助（茶）、小田代慶太郎・長嶺林三郎・柳川秀興（牛・豚）らが、それぞれの農産物に関する外国種移入や品種の交配・改良・開発など、育種学的な研究・調査を進め、生産性の向上を図った。甘蔗・米・果樹の分野には農学、茶は農芸化学、牛・豚は畜産学の、各研究室出身者が占めた。

⑵　虫害・病害への対策――昆虫学・植物病理学――

一方、生産性向上を阻害する農産物の虫害・病害対策として、台湾総督府は昆虫学や植物病理学を専門とする技手・技師を配置した。石田昌人は主に甘蔗の虫害を担当し、素木得一は台湾産昆虫の研究を通じて病虫害対策を進めた。川上瀧彌は台湾植物の悉皆的調査を行ない、三宅勉は甘蔗の、鈴木力治はそれ以外の植物の病害対策に当たった。

国立台湾博物館の基礎を築いた川上、「蓬莱米」開発の磯、台湾の国蝶「フトオアゲハ」を発見した素木は、現在も台湾の人々にその業績を高く評価されている。ただし、これらの「業績」も日本の台湾植民地統治の文脈の中で行なわれたものであることを看過してはならないだろう。

３－４．展示第Ⅲ期の概要パネル

Ⅲ．産業化と農芸化学、そして台北帝国大学

⑴　生産増強と農産物の商品化――農芸化学――

台湾における農業生産の増強と、農産物の商品化に農芸化学研究は大きな役割を果たした。生産面においては各農作物あるいは気候・地形に適合する土壌・肥料・農薬の改良・開発、商品化過程においては成分分析・醗酵・醸造・加工などの研究である。札幌農学校教授から台湾総督府技師に転じた大島金太郎の存在は大きく、試験場・研究所から民間会社に至るまで、土壌・肥料・製糖・製茶・煙草・罐詰加工といった農芸化学分野の技術者は北大卒業生が占めた。

⑵　台北帝国大学

台湾総督府は1919年に農林専門学校(後に高等農林学校)、1928年に台北帝国大学を設置し、農業高等教育と農学研究に力を入れた。両校の開設に関わった大島金太郎は高等農林学校長・台北帝国大学理農学部長に就任し、多くの北大卒業生が両校の教員となった。特に台北帝国大学理農学部では強固な北大閥を形成し、山根甚信（畜産学)、素木得一（昆虫学)、三宅捷（農芸化学）が学部長を歴任した。

1945年の終戦に伴い、中華民国が台北帝国大学を接収した。接収には北大に留学経験のある羅宗洛が当たった。戦後、多くの北大出身教員が帰国する中にあって、素木得一、磯永吉（作物学)、松本巍（植物病理学）は、戦後も国立台湾大学教授として教育・研究を続けた。

4．展示資料目録

Ⅰ．統治・経営と農業経済学

No. Ⅰ－1	柳本通義の札幌農学校入学証書（1876年７月14日）
	文書／大学文書館蔵（札幌農学校簿書047-7）
柳本通義は、1876年、東京英語学校（後の東京大学予備門）在学中にW．S．クラークらからスカウトを受け、札幌農学校に第１期生として入学した。同期には後に札幌農学校長となった佐藤昌介らがいた。	
No. Ⅰ－2	柳本通義の台湾総督府採用に関する文書（1896年３月16日）
	文書／国史館台湾文献館蔵（複製）
台湾総督府殖産部長橋口文蔵が、殖民事業に精通し、拓殖業務に長年従事した経験のある北海道庁技師柳本通義の採用を上申した文書。橋口は、以前、札幌農学校長や北海道庁幹部を務めており、北海道庁では柳本の上司であった。	
No. Ⅰ－3	藤根吉春の札幌農学校入学願（1885年５月２日）
	文書／大学文書館蔵（札幌農学校簿書244-7）
藤根吉春は、盛岡中学校から札幌農学校に第８期生として入学した。同期には、台湾で同僚となる横山壮次郎、長崎常のほか、後に札幌農学校教授となる橋本左五郎（畜産学）、藤田経信（水産学）がいた。	
No. Ⅰ－4	藤根吉春の「宜蘭支庁管下殖民地調査復命書」（1897年５月11日）
	文書／国史館台湾文献館蔵（複製）
藤根吉春は殖産部拓殖課技手として、移民100戸の入殖地選定のため、台湾北東部の宜蘭周辺を調査したが、「団体移住ニ適スル地ナシ」と結論付けている。また、叭哩沙原野には樟（クスノキ）が産することを報告している。台湾総督府はクスノキから製する樟脳の生産に力を入れるが、復命書にもあるように、樟脳生産の成否にはクスノキ産地に居住する先住民族との関係が大きく影響した。総督府による樟脳生産地拡大は、先住民族の狩猟場の横奪を意味し、先住民族の抵抗が激化するためであった。叭哩沙にも先住民族を統治・監視する叭哩沙撫墾署があり、署長の小野三郎は札幌農学校卒業生（第５期生）であった。	
No. Ⅰ－5	天然樟脳
	物品／大学文書館蔵
No. Ⅰ－6	セルロイドの琴（樟脳からの製造品）
	物品／大学文書館蔵
No. Ⅰ－7	横山壮次郎卒業論文“Geology of the Environs of the Ishikari Plain”（1889年）
	文書／大学文書館蔵（札幌農学校卒業論文011）
横山壮次郎は鹿児島出身で、初代文部大臣森有礼の甥にあたった。東京の私立学校で英語等を学び、1885年、札幌農学校に入学した。札幌農学校では、1893年ころまで外国人教師が農学・化学などの専門科目を英語で講義していたため、英語の学力が必須であった。横山のように英文卒業論文を提出する学生も少なくなかった。	

No. Ⅰ－8	横山壮次郎を臨時台湾糖務局糖務課長とする内申（1902年６月14日）

文書／国史館台湾文献館蔵（複製）

殖産局農商課長の横山壮次郎は、臨時台湾糖務局長新渡戸稲造の下で糖務課長を兼務し、製糖業振興策を担当した。殖産局の同僚であった柳本通義が樟脳産業を担当したのに対し、新渡戸と横山は主に製糖業に携わった。また、このとき、臨時台湾糖務局台南支局長を命ぜられた堀宗一も、札幌農学校卒業生（第３期生）で、1904年まで同職を務めた。

No. Ⅰ－9	十川嘉太郎の工学科入学証書（1888年10月15日）

文書／大学文書館蔵（札幌農学校簿書890）

十川嘉太郎は、予科を経て1888年に札幌農学校工学科に進学した。札幌農学校は、1887年、農学科のほかに工学科を新設し、1897年まで７期16名の工学科卒業生を輩出した。第２期生廣井勇が教授を務め、卒業生には石狩川治水で著名な岡崎文吉（工学科第１期生）、満鉄総裁を務めた大村卓一、柔構造理論の真島健三郎（以上、工学科第６期生）らがいる。

No. Ⅰ－10	十川嘉太郎が建設工事を手掛けた基隆港、明治橋

刊行物／附属図書館蔵、農学研究院図書室蔵（複製）

十川嘉太郎は、最初の築港係長として、基隆港に3,000トン級の船４隻を繋留できる仮桟橋を建設し、基隆築港事業に先鞭を付けた。また、十川が台北郊外の台湾神宮参道に建設した明治橋は、橋がまたぐ基隆河、台湾神宮のある劍潭山と相俟って、景勝として知られていた。

（『十川さんの面影』・『顧台』口絵より）

No. Ⅰ－11	札幌農学校第８期生卒業を祝して、本科生一同（1889年６月）

写真／附属図書館蔵（橋本左五郎関係資料024、複製）

藤根吉春（２列目左４番目）、横山壮次郎（同５番目）、長崎常（前列左３番目）ら。第８期生と共に、工学科１年級の十川嘉太郎（３列目右４番目）の姿も見られる。

No. Ⅰ－12	高岡熊雄宛て新渡戸稲造書簡（1904年１月４日付、台北）

封書／大学文書館蔵（高岡熊雄関係資料）

新渡戸稲造が、ドイツ留学をしている愛弟子の高岡熊雄（第13期生、当時は札幌農学校助教授：農政学専門）に、台湾での近況を知らせた書簡。

（略）又た不日南部（台湾の）地方ニ巡廻し糖業を視察スベし本年糖業の勢熾んなり、製造所（Damptmaschinen［蒸気機関］の）昨年より四ヶ所出来、本年中ニハ猶七ヶ所も増ス様ナ形勢ダ　来月ハ此地を去り京都［京都帝国大学］ニ出かけ、開講スル積り、講義ハ農業経済、山林経済、殖民論ダ、今夕ハ同窓会を催せるに出席者ハ加藤（重任）進龍男（殖産局嘱託）柳本［柳本通義］、藤根［藤根吉春］、横山［横山壮次郎］、鈴木眞吉（試験所）小華和［小花和太郎］、東条［東條秀介］（四五日前爪哇ヨリ帰朝）本間［本間作馬］（伝習科卒業）今井［今井兼次］（予科）川上滝弥　右之外地方ニ桜田［桜田廣治］、蛎崎［蛎崎知二郎］、堀宗一、池田和吉あり　先日迄テ芳賀亀太郎も居たるが此間辞職せり青柳［青柳定治］も此度辞職せり　（［　］は補語）

No. Ⅰ－13	台湾恒春にて（1905年）

写真／大学文書館蔵（高岡熊雄関係資料）

1905年、恒春庁長柳本通義は、台湾統治状況視察のため台湾最南端の恒春を訪れた新渡戸稲造・高岡熊雄ら一行を迎え入れた。前列左より、柳本通義（恒春庁長）、新渡戸稲造（臨時台湾糖務局嘱託）。前列右端が高岡熊雄（札幌農学校教授）。後列左より、東條秀介（第15期生、臨時台湾糖務局台南支局技師）、横山壮次郎（臨時台湾糖務局糖務課長）。

No. Ⅰ-14	長崎常の開識社における演説「農学とハ何そや」（1888年９月29日）
	文書／大学文書館蔵（開識社記録）
札幌農学校本科４年級のとき、長崎仁吾（常）は寄宿舎の弁論大会「開識社」で、「農学とハ何そや」と題して演説を行なった。農学は職業（農業と農民）を起源とするものだから、農学者は「学理上」（学術上）より「理財上」（経済上）の利害を重視しなければならないと説いている。	
No. Ⅰ-15	『台湾農事報』に掲載された長崎常、色部米作の論文
	刊行物／附属図書館蔵（複製）
・長崎常「台湾に於ける単位面積産米増殖論」（第170号、1921年１月） ・色部米作「本島に於ける農業倉庫の利用」（第72号、1912年11月） 台湾総督府の農政関係技師は専門分野に関する論文を台湾農友会機関誌『台湾農事報』に寄稿している。長崎は米増産関係、色部はサトウキビ生産に関する論文が多い。	
No. Ⅰ-16	東郷實の札幌農学校寄宿舎退舎の言（1903年６月１日）
	文書／大学文書館蔵（寮関係資料024）
札幌農学校本科２年級の東郷實が寄宿舎を退舎するに当たり、挨拶文を舎内に掲示した。このときの寄宿舎生25名の内、芳賀鍬五郎（第20期生）、鈴木力治（第23期生）、池田競（1908年卒）と東郷の４名が、後に台湾に渡った。	
No. Ⅰ-17	高岡熊雄宛て東郷實書簡（1907年４月４日付、東京）
	封書／大学文書館蔵（高岡熊雄関係資料）
地方庁の技師であった東郷實は、台湾総督府内にあっては新渡戸稲造に、母校にあっては佐藤昌介校長・高岡熊雄教授に、「速かに中央部に入りて大なる台湾の研究に従事し得る様 御侭力なし下され度」と懇願し、台湾農政の中枢への転身を画策した。	
No. Ⅰ-18	色部米作の実科課目願書（1904年６月29日）
	文書／大学文書館蔵（札幌農学校簿書996）
札幌農学校では本科３年級になると、農芸化学・植物病理学・農業経済学・農学・畜産学・農用動物学のいずれかの「実科課目」（専門科目）を選択することになっていた。「実科演習」ではゼミナール方式の講義を行なった。色部米作は「農業経済学」を選択し、願書を提出した。色部の同期（第23期生）からは、素木得一（農用動物学）、鈴木力治（植物病理学）らが台湾に渡っている。	
No. Ⅰ-19	高岡熊雄宛て色部米作書簡（1925年１月26日付、台北）
	封書／大学文書館蔵（高岡熊雄関係資料）
糖業農政に従事していた色部米作（台湾総督府殖産局特産課技師）は、台湾の製糖業界への人脈が広く、同窓生の就職斡旋も行なっていた。本書簡では、母校の高岡熊雄教授に、新高製糖株式会社へ就職させる新卒業生の推薦を依頼している。	

Ⅱ．生産・技術と植物学・農学

No. Ⅱ-１	芳賀鍬五郎が書いた「遅刻証明書」（1900年１月13日）
	文書／大学文書館蔵（札幌農学校簿書696）
札幌農学校本科２年級芳賀鍬五郎が、農学校寄宿舎生の同４年級星野勇三（第19期生）のために、「拙者と遊ひ居り午后［前］拾二時半まて留まり遂に門限時刻に遅れ候間此段証明候也」と、遅刻理由を証明した。芳賀と星野は同郷（山形）で、共に園芸学、特に果樹栽培を専門とした。星野は後に北海道帝国大学教授となる。	

No. Ⅱ－2	芳賀鍬五郎「バナ、（蕉芎）の栽培」（1912年２月）
	刊行物／附属図書館蔵（複製）
芳賀鍬五郎が渡台前に留学したキュー王立植物園は、世界最大の植民地領有国であったイギリスの、外来植物移植中継基地であった。芳賀は植民地農業専門技術者として台湾に赴任したのである。芳賀が台湾で栽培に力を入れた熱帯産果実は、現在、「トロピカルフルーツ」として日本の食卓にのぼっている。展示資料は、芳賀がバナナの栽培から出荷・運送・販売方法といった実用的な内容を論じた論文。中国語訳も同じ雑誌に掲載している。　（『台湾農事報』第63号）	
No. Ⅱ－3	長嶺林三郎の「修学旅行報告書」（1900年３月）
	文書／大学文書館蔵（札幌農学校簿書672）
札幌農学校本科３年級長嶺林三郎は、夏１ヶ月にわたり、日高、函館、青森県の牧場を視察調査する修学旅行を行なった。農学校に提出した報告書には、牧場の経営規模、家畜の種類・数、飼育法、飼料、販路、畜舎などを詳細に記録している。	
No. Ⅱ－4	長嶺林三郎・柳川秀興「エンシレージ製造法竝ニ恒春種畜場ニ於ケル実験成績」（1911年11月）
	刊行物／附属図書館蔵（複製）
恒春種畜場主任の長嶺林三郎は、アメリカ・ヨーロッパ・アジア各地を視察し、台湾畜産業振興の方針を立案し、着手した。後任の柳川秀興（東北帝国大学農科大学1909年卒業）が、それを実行へと移していく展示資料は、牧草の発酵貯蔵に関する調査報告。　（『台湾農事報』第60号）	
No. Ⅱ－5	金子昌太郎「夏期修学旅行報告」（1903年）
	文書／大学文書館蔵（札幌農学校簿書786）
金子昌太郎は、札幌農学校本科４年級の８月から９月にかけて、青森、弘前、秋田、新潟、長野、群馬、東京、横浜、大阪などを回り、各地の農況、事業、労働者などの調査をする修学旅行を行なった。各地で札幌農学校 OB などに面会し、施設等を見学して報告書を作成し、提出している。	
No. Ⅱ－6	宮部金吾宛て金子昌太郎書簡（1915年11月20日付：米国ルイジアナ州、1916年１月４日付：ギアナ、1916年１月11日付：バルバドス）
	絵葉書／大学文書館蔵（宮部金吾旧蔵書簡）
金子昌太郎は、糖業試験場で、病害に対する抵抗力の強い甘蔗（サトウキビ）の品種を育成するために、実生交配育種（苗の植え付けによる増殖育成ではなく、花粉交配により出来た種子を播いて育成すること）に取り組んだ。1913～25年度にかけて、金子は約10万種の実生を成育させ、優良品種35種を選択するまでに至った。1915～16年、海外視察に赴いた金子は、米国のニューオーリンズで Sugar Experiment Station（糖業試験場）を、バルバドス（カリブ海、英国領）で Cane seeding（甘蔗苗の育成）を視察したことを各地の絵葉書に添えて母校の宮部金吾教授に伝えた。	
No. Ⅱ－7	磯永吉の在学証書（1905年11月15日）
	文書／大学文書館蔵（札幌農学校簿書999）
磯永吉は広島県の私立日彰館中学校を卒業し、札幌農学校予修科に入学した。在学中に農学校は帝国大学に昇格したため、東北帝国大学農科大学本科に進学した。	

No. Ⅱ－8	磯永吉「蓬莱米の品質に就て」など（1927年12月）
	刊行物／大学文書館蔵（植物学教室旧蔵論文別刷コレクション）
台湾総督府は早くから糖業振興と共に米増産を農業政策の主軸に据え、台湾在来のインディカ米や日本産のジャポニカ米の作物学・育種学研究を進めた。1910年代から日本産米の品種改良を主導したのが農事試験場(後に中央研究所)技師の磯永吉である。磯は、1924年、多肥栽培に耐え、二期作にも適した「台中65号」の開発に成功した。これら日本産改良種は「蓬莱米」と総称され、1930年代前半には台湾在来種の収穫高を凌ぐようになった。展示資料は、磯が「蓬莱米」普及のために、その品質の高さや、台湾在来種との商品的価値の比較を論じた報告。	
No. Ⅱ－9	素木得一の入学願書（1900年６月11日）
	文書／大学文書館蔵（札幌農学校簿書729-3）
素木得一は函館師範学校長の長男として生まれた。素木は北海道尋常師範学校附属小学校高等科、札幌中学校を経て、札幌農学校予修科に入学した。北海道居住者としては、当時考え得る最上のエリートコースであった。	
No. Ⅱ-10	素木得一『綿吹介殻虫調査報告』（1911年３月）
	刊行物／附属図書館蔵（複製）
ワタフキカイガラムシは、台湾で街路樹として栽植されるタイワンアカシアなどに寄生する害虫。農事試験場技師の素木得一は、アメリカから天敵のベダリアテントウムシを持ち帰り、ワタフキカイガラムシ駆除に成功した。天敵を利用したこの駆除法の成功は学界に広く紹介され、素木の名を高めた。	
No. Ⅱ-11	石田昌人の入学願（1894年12月24日）
	文書／大学文書館蔵（札幌農学校簿書911）
石田昌人は仙台の高等小学校を卒業後、札幌の北海英語学校・北鳴学校を経て札幌農学校農芸伝習科に入学した。農芸伝習科は農学校所属農園（農場）内にあり、４～11月は農業実習、冬期は学科講義を行なう２年間の実業教育コースであった。学科には「農業経済」「害虫駆除法」など、実習には「農具使用」「穀菽及蔬菜耕種」「果実糖漬及醸造法」などがあった。	
No. Ⅱ-12	宮部金吾宛て石田昌人書簡(1925年５月22日・６月６日付：ジャワ、７月２日付：台南)
	絵葉書／大学文書館蔵（宮部金吾旧蔵書簡）
1910～20年代、台湾南部の各製糖会社が推奨した甘蔗の早植は、害虫「綿蚜虫」（アブラムシ）の大発生を引き起こし、甘蔗栽培上の大問題となった。糖業試験場技師の石田昌人は、製糖会社から防除対策を委嘱され、綿蚜虫の体に寄生する蜂をジャワから輸入して人工繁殖に取り組み、益虫（寄生蜂）による綿蚜虫の防除に成功した。宮部金吾教授に宛てた絵葉書には、寄生蜂を冷蔵箱に収納・携帯して輸入する経過のほか、「マンゴスチン　先生の食卓に供し度いも残念」と宮部教授への敬慕が記されている。	
No. Ⅱ-13	植物病理学教室雑誌講読会記録（1902年10月９日）
	文書／大学文書館蔵（植物学教室旧蔵資料）
札幌農学校病理学教室のメンバー・OBで開催していた雑誌講読会の記録。宮部金吾教授、高橋良直（第13期生、北海道農事試験場技師）、山田玄太郎助教授（第16期生）、半澤洵助教授（第19期生）らに交じって、本科３年級の三宅勉が参加している。東京帝国大学理科大学を卒業したばかりの新進気鋭の植物学者柴田桂太の欧文論文をテキストに勉強会を開催している。	

No. Ⅱ-14	三宅勉「甘蔗露菌病ニ関スル研究予報」原稿（1911年３月）
	刊行物／大学文書館蔵（植物学教室旧蔵論文別刷コレクション）
1906年糖業試験場が開場して間もなく、台湾総督府が作付面積収量の増進（蔗茎の増収）をはかるために輸入した外国品種の甘蔗苗から病害が発生し、感染は年々拡大していた。1910年糖業試験場に赴任直後の三宅勉は、場内に大蔓延していた甘蔗病害を調査し、その病害が「露菌病」であることを検定した。原稿の朱筆は、宮部金吾教授による添削。	
No. Ⅱ-15	鈴木力治「植物採集修学旅行報告文」（1903年12月２日）
	文書／大学文書館蔵（札幌農学校簿書780）
札幌農学校本科２年級鈴木力治は、同級の宮城鐵夫、大竹温孝と共に10月に２日間、高島郡で植物採集修学旅行を行なった。鈴木は顕花植物の採集リストを作成し、農学校に提出する報告文に添付した。	
No. Ⅱ-16	宮部金吾宛て鈴木力治書簡（1908年４月17日付、台北）
	封書／大学文書館蔵（宮部金吾旧蔵書簡）
鈴木力治は、台北・台中地域の農作物病害菌の調査に取りかかり、病害菌を検定して、先輩の川上瀧彌と共に1908年９月『台湾農作物病害目録（其一）』を上梓した。母校の宮部金吾教授に宛てた書簡から、鈴木力治が、同目録の刊行にあたり、札幌の宮部教授に原稿と病害菌標本を送って、「御訂正 御添削の御恵を賜度」と指導を仰いでいることがうかがえる。宮部教授は、鈴木力治ら渡台した愛弟子たちに、腊葉（タイプ標本）と最新の専門書籍も提供して、病原菌の検定を援助した。	

Ⅲ．産業化と農芸化学、そして台北帝国大学

No. Ⅲ-１	渋谷紀三郎『台湾亜爾加里土壌調査報告』（1912年12月）
	刊行物／附属図書館蔵
渋谷紀三郎は台湾のアルカリ性土壌が植物の成長に及ぼす影響について調査した。対応策として、アルカリ性土壌の土地改良については「適度ノ灌漑」、利用法として「農耕上適応ノ作物ヲ選定シ之ヲ栽培スル」ことなどを提言した。	
No. Ⅲ-２	渋谷紀三郎の実科撰定願（1906年６月27日）
	文書／大学文書館蔵（札幌農学校簿書996）
札幌農学校では３年級から専攻分野に分かれることになっていた。渋谷紀三郎は「農芸化学」を選択した。当時、農芸化学の教授は吉井豊造と大島金太郎であった。渋谷の同期26名中、農芸化学を選択したのは４名であった。	
No. Ⅲ-３	吉川藤左衛門「修学旅行報告」（1906年９月）
	文書／大学文書館蔵（札幌農学校簿書814）
吉川藤左衛門は、札幌農学校本科４年級になった夏休み、７月４日から９月２日に盛岡、東京、郷里長野を回り北海道に戻る夏期旅行を行なった。報告書には各地の農村、高等農林学校、博物館、製糸工場、入植地などの状況を記述した。また、９月22日から樺太へ修学旅行に出掛け、樺太の農産製造調査をする計画も記している。	

No. Ⅲ－4	台湾総督府民政部殖産局『検糖所分析成績彙集』（1917年３月）
	刊行物／附属図書館蔵
台湾総督府は1912年に殖産局附属検糖所を台湾南部の高雄に開設した。検糖所は砂糖やサトウキビの肥料、砂糖関係物の成分分析を行なった。後に研究所・中央研究所の一部として改編されるが、所長は吉川藤左衛門が続け、吉川逝去後は、後輩であり部下でもあった菅野修一郎（東北帝国大学農科大学1912年卒業）が所長を引き継いだ。	
No. Ⅲ－5	高雄検糖所（定温度用冷却機室）（1915年４月）
	刊行物／附属図書館蔵（複製）（『台湾農事報』第101号口絵より）
No. Ⅲ－6	山田秀雄の卒業論題届（1897年10月４日）
	文書／大学文書館蔵
札幌農学校で農芸化学を専攻した山田秀雄は、４年級のとき、卒業論文テーマとして「土壌淘汰分析ノ効力ニ就テ」を届け出た。指導には吉井豊造教授と大島金太郎助教授が当たった。	
No. Ⅲ－7	山田秀雄「烏龍茶に就て」（1910年11月）
	刊行物／附属図書館蔵（複製）
山田秀雄は、台湾が茶の世界総生産額の２％を占めるに過ぎない状況で、生産増加・品質改良・販路拡張により、北米・南洋を中心に輸出増大を図ることができると主張した。次号（1910年12月）には中国語訳も掲載された。烏龍茶は中国大陸と台湾に特有の製茶技術で生産し、台湾の土質・気候に極めて適合的で、「品質優等芳香馥郁として他に比類なき」と世界的な定評があることをあげ、台湾の主要輸出産品としての将来性の高いことを山田は指摘した。 （『台湾農事報』第48号・第49号）	
No. Ⅲ－8	台湾製烏龍茶
	物品／大学文書館蔵
No. Ⅲ－9	出田新宛て大島金太郎書簡（1894年７月26日、札幌）
	封書／大学文書館蔵（持田誠寄贈資料）
札幌農学校を卒業して研究生となり、北海道庁で化学分析に従事していた大島金太郎は、研究への情熱を押さえ難く、東京へ出る相談を周囲にした。しかし、相談を持ち掛けた田中舘愛橘帝国大学教授、佐藤昌介札幌農学校長、指導教官の吉井豊造教授からは期待するような応答を得られず、上京を断念せざるを得なかった。大島は、こうした自身の近況を同期卒業の親友出田新に書き送った。	
No. Ⅲ－10	大島金太郎に大学創設準備事務を嘱託する内申文書（1925年12月11日）
	文書／国史館台湾文献館蔵（複製）
大島金太郎は中央研究所農業部長、高等農林学校長などを歴任し、台湾に大学を創設する際の担当者として適任であった。大島は、台北帝国大学創設に中心的に関わり、その後も理農学部長として教員人事などに大きな権限を持った。理農学部農芸化学科の教員スタッフは、ほぼ北大卒業生が独占することになった。	
No. Ⅲ－11	濱口榮次郎の入学願書（1910年６月１日）
	文書／大学文書館蔵（帝大簿書228）
濱口榮次郎は和歌山県日高郡南部町に生まれた。県立田辺中学校を経て東北帝国大学農科大学予科に入学した。	

No. Ⅲ-12	濱口榮次郎「耕地白糖製造法の清浄に関する研究」（1936年３月）
	刊行物／大学文書館蔵
製糖化学講座を主宰した濱口榮次郎は、耕地白糖（サトウキビの栽培現地の製糖工場で直接作られる白糖）技術研究の先駆者であった。東洋製糖㈱勤務から従事した研究は、台北帝国大学理農学部の製糖化学講座においてもさらに進められた。 （『製糖化学彙報』第４巻第１号）	
No. Ⅲ-13	山根甚信講義「羊学」（三田村健太郎受講ノート、1922-23年）
	ノート／大学文書館蔵（畜産学科旧蔵資料）
山根甚信が北海道帝国大学農学部助教授時代の講義を記録したノート。山根は馬を研究分野の中心としたが、牛を専門とする畜産学第三講座を担任し、「羊学」も講義していた。三田村健太郎は後にこの講座の主任教授となる。	
No. Ⅲ-14	山根甚信「熱帯及び亜熱帯に於ける家畜改良問題」（1932年８月）
	刊行物／附属図書館蔵
山根甚信は、台湾の熱帯性家畜について、風土適応性、獣疫抵抗性を高く評価しつつ、温帯性家畜のような経済的価値に乏しいことを指摘し、こうした長短所を考慮した牛・豚・鶏の品種改良と繁殖法を提唱した。（『台湾農事報』第28年第８号）	
No. Ⅲ-15	宮部金吾宛て松本巍書簡（1916年１月、逗子）
	絵葉書／大学文書館蔵（畠忠正寄贈資料068）
1916年、東北帝国大学農科大学３年生の松本巍は、７月卒業を目前にして体調を崩して余儀なく学業を中断し、転地療養に至った。療養地(湘南逗子)から宮部金吾教授に送った絵はがきには、一日も早く帰札を願う気持ちが綴られている。	
No. Ⅲ-16	宮部金吾宛て松本巍書簡（1948年４月19日付、台北）
	封書／大学文書館蔵（宮部金吾旧蔵書簡）
1948年４月、国立台湾大学では日本籍の教授の約半数が帰国することになり、植物学系教員は松本巍ひとりとなった。書簡には、国立台湾大学での教育・研究環境の近況報告のほか、「母校のない連中で御座いますから、今後は色々と札幌の先生方にも御世話になる事となりませう」と台北帝国大学卒業生たちの将来を心配する様子が綴られている。	
No. Ⅲ-17	松本巍「台湾煙草之病害」（1946年12月）
	刊行物／大学文書館蔵（植物学教室旧蔵論文別刷コレクション）
終戦後、『国立台湾大学農学院研究報告』第１巻第１号として刊行されたのは、松本巍「台湾煙草之病害」（英文）であった。展示資料は、恩師の宮部金吾に献呈されたもの。	
No. Ⅲ-18	宮部金吾宛て羅宗洛書簡（1930年３月26日、中華民国）
	封書／大学文書館蔵（宮部金吾旧蔵書簡）
北海道帝国大学大学院を修了した羅宗洛は、母国の国立中山大学生物学系教授に就任した。羅宗洛は、同大学に集積された植物標本の鑑定を進め、植物生理学の教育研究環境を整備していく抱負を、恩師の宮部金吾に伝えた。	
No. Ⅲ-19	羅宗洛「接収台湾大学日誌」（1945年10月19日の条）
	刊行物／大学文書館蔵
台北帝国大学接収委員として来学した羅宗洛は、北大同窓生の山根甚信教授、松本巍教授、後藤一雄助教授を訪ねて、植物学教室の先輩や恩師（坂村徹・宮部金吾）の近況を聞き歩いた。先輩の松本巍と会した瞬間を、羅宗洛は「相見之下、悲喜交集」と記している。 （『羅宗洛校長與臺大相關史料集』2007年、201～203頁より）	

5．パネル

5－1．展示パネル目録

No. Ⅰ-P1	藤根吉春「初期台湾殖民構想の頓挫」
領台初めは官吏も台湾の事情が薩張りわからないので、漠然と不毛地が多いに相違ないから内地人を移すことの極めて必要であると考へないものは無かった。何でも明治三十年に、五百戸を容れやうと云ふ計画を立て、其の補助費を請求した所、議会を通過しそうとの電報が在京木村秘書官（匡）から到達した、サー大変実はまだ移民地が確定して居らぬので故横山［壮次郎］技師は南部僕は苗栗以北と手を分けて調査をしたが曩の某々技師等の予定地は不適当と考へ其趣復命に及ぶと押川［則吉］殖産部長（現製鉄所長官）より君等は北海道の積りで土地を視るからだと一喝された。幸に調査不十分と云ふ廉で補助否決されたから事なきを得た。其後近年迄移民補助費は提出されなかつた。　　（『台湾農事報』第100号、1915年３月、11頁より、［　］は補語）	
No. Ⅰ-P2	台湾全図（1914年）
（東郷實『台湾農業殖民論』附図より）	
No. Ⅰ-P3	台湾恒春のガジュマル（1905年）
写真／大学文書館蔵（高岡熊雄旧蔵資料）	
台湾統治状況視察中の新渡戸稲造ら一行	
No. Ⅰ-P4	札幌同窓会台湾支会員（1901年１月24日）
写真／附属図書館蔵（農科大学A-4）	
渡台した新渡戸稲造（京都帝国大学教授）を囲み、札幌農学校卒業生たちが台北で午餐会を開催した。	
No. Ⅱ-P1	芳賀鍬五郎「台湾は天然の恩恵ゆたか」
果樹の如きは其の自生なると栽培せらるゝと相合する時は、其数実に六十種に上り、（略）果実の最も多く生産せらるゝは八月の交にして十一種を算すべし、最も少なきは二月上旬にして、而かも猶ほ五種を数ふべし、全年を通ふじて絶えず生産せらるゝものは芎蕉［バナナ］と楊桃［スターフルーツ］とである。げに是れを以て見るも我が台湾は天然の恩恵裕なるを知ることが出来るであらう（略）元来熱帯果実には実に美味なる珍果多きも、概して保存力小なるが為め、遠距離の市場に輸送することは頗る困難である。然れども製造法と輸送法を改善する時は内地市場に搬出することは不可能ではあるまい。鳳梨［パイナップル］、芎蕉と相共に荔枝［ライチ］、様仔［マンゴー］、木瓜［パパイヤ］及マンゴスチーンの如きを内地市場に送り、内地在住の邦人にも熱帯果実の珍味を愛玩せしめたならば如何に幸福であらう。 （芳賀鍬五郎「台湾の園芸事業」『明治園芸史』1915年10月、２，６，28頁より、［　］は補語）	
No. Ⅱ-P2	龍眼肉（Euphoria Longana）　パン樹の果実（Artocarpus Communis） 鳳梨（パイナップル）　芭蕉実（バナナ）　木瓜（パパイヤ）
絵葉書／大学文書館蔵	
No. Ⅱ-P3	台湾総督府の各種試験場の配置図（1930年）
色塗り分割された区域は、各製糖会社の原料（甘蔗：サトウキビ）採取区域 （台湾総督府殖産局糖務課『第十八台湾糖業統計』附図より作成）	
No. Ⅱ-P4	園芸試験場の木瓜園（1917年、士林）
（台湾総督府殖産局『台湾の熱帯果樹』第３巻口絵より）	
No. Ⅱ-P5	農事試験場（1913～1915年頃、台北）
（『台湾総督府農事試験場創立十年紀年』、『台湾農事報』第100号口絵より）	

No. Ⅱ−Ｐ6	糖業試験場（1912年、大目降）
	（金子昌太郎『甘蔗農学』口絵より）
No. Ⅱ−Ｐ7	種畜場におけるブラウンスミスの雑種牛（1913年、恒春）
	（『台湾農事報』第77号口絵より）
No. Ⅱ−Ｐ8	素木得一「台湾赴任時のこと」（1907年）
基隆に着いた日に先輩で川上滝弥という植物の専門家(総督府の技師兼農事試験場の病理部長)、宮部先生の弟子ですよ。その人が迎えに来てくれて、台北まで行った。その人の家に落ちついて御馳走になった時に、初めてバナナを食べたんです。大変おいしくて沢山食べたのでそれ以来見るのもいやになり、こんどはバナナを食べなくなったんです。その翌日宮尾［舜治］殖産局長に挨拶にいったんですが（略）明日からすぐ螟虫［草木の茎・枝の内部に食い込む、昆虫の幼虫の総称］の駆除をやってくれと（略)。それから僕はそんなことは出来ません、もしそういう事ならこれでおいとまして日本に帰りますと言った（略)。翌日、また局長から呼び出しがあって、お前の言うとおりこれから研究しなさいと（略)。それで、研究して駆除がうまくいくようにやりましょうと約束して、ようやくおさまってその日から農事試験場に勤めることになったというわけです。　（素木得一『思い出すままに』1969年、15～16頁より、［　］は補語）	
No. Ⅱ−Ｐ9	素木得一「害虫駆除と昆虫学研究」
［害虫駆除のための］天敵利用はよくその地方の昆虫を全部調べ上げて、その上でなければうまくいかない。そういう理由で、台湾では駆除の方法よりも台湾の昆虫の調査に全力を挙げてやっていたわけなんです。みんなに素木には害虫駆除などできはしないよ。あんなことをやっているのだからと馬鹿にされていたもんですが、僕はまあこれが本当だと思うんです。日本だって昆虫の全部の研究がうまくできれば､天敵利用もうまくいくと思うんです｡それなしに天敵利用といっても、あまり面白い結果にはならん。それから害虫駆除のいろいろの方法もうまくいかないと思うんです。　（素木得一『思い出すままに』1969年、26頁より、［　］は補語）	
No. Ⅲ−Ｐ1	〔リスト〕「渡台した農芸化学専攻生たち」
	（大学文書館作成）
No. Ⅲ−Ｐ2	宮島博〔1924年卒業、大日本製糖（株）勤務〕「北大閥の形成」
我々の卒業当時は農芸化学科の卒業生といえば就職先は役人ならば農事試験場か煙草専売局が多かったが民間では製糖会社かビール会社が多かった。当時は北大農科卒業生の活躍場所は北海道が第一だが、次は台湾と満州であった。なにしろ札幌農学校時代からの大先輩がたくさんいて地盤を固めていたから居心地は良いわけである。およそ昔の原料生産を含んだ甘蔗［サトウキビ］製糖事業ほど農科特に農芸化学科卒業生向きの職業はあるまい。まず広大なる農場あるいは製糖所区域内で甘蔗栽培の指導を初めとして、その生育収穫運搬圧搾清浄結晶の一貫作業で土壌学、肥料学植物生理から原料代の買収の計算は農業経済と関係があり、工場の製糖技術は農芸化学の独壇上でまったく一貫しておもしろい事業である。 （宮島博「台湾糖業の先輩たち」より、［　］は補語）	
No. Ⅲ−Ｐ3	台湾の産業（稲・甘蔗・樟脳・茶）
	（川上廣衛旧蔵絵葉書／佐藤政雄氏提供）
左下の立方体は、台湾製糖株式会社製の角砂糖	
No. Ⅲ−Ｐ4	〔チャート〕「サトウキビから砂糖ができるまで」
	（『台湾製糖株式会社史』1939年、口絵より作成）

No.Ⅲ-P5	台湾全図（1914年）
（東郷實『台湾農業殖民論』附図より）	
No.Ⅲ-P6	〔リスト〕「台北帝国大学理農学部教授に就いた北大卒業生」
（大学文書館作成）	
No.Ⅲ-P7	台北帝国大学航空写真
（『台北帝国大学理農学部創立六十年記念』口絵より）	
No.Ⅲ-P8	大学正門の今昔
左下は台北帝国大学正門、右上は国立台湾大学正門 （左下：『台湾事情　昭和十二年版』口絵より、右上：大学文書館撮影写真）	
No.Ⅲ-P9	松本みと志〔松本巍夫人〕「台北帝国大学の接収」
彼［夫の松本巍］が疎開先から帰つて、初めて教室に出た時、訪ねて来られたのは、其羅宗洛博士であつた。…羅氏は其時「自分は今日接収委員としての公人ではなく、宮部先生の門下生として、先輩のところへお願いに来ました。何卒此のまゝ中国に留まつて、今迄通り研究をつづけ、同時に中国本土の各大学を巡廻して、中国青年達に、日本の戦闘的研究心を鼓吹して欲しい」と懇請された。…彼は今迄の敵なる戦敗国の一教授に対する羅氏の国際的学者態度にすつかり感激…敗戦の憂き目を見た日本国人に、たとえ恩師の門下生同志とは云え、そのわだかまりのない寛大さに打たれ、…其場で即座に羅氏の乞いに、応じたのであつた。そして其日帰宅するなり、羅氏とのいきさつを話して、「僕は貴女に相談しなかつたが、中国に骨を埋める覚悟をしたよ」と報告した。 （『松本巍　み足のあとをしたいつつ』1975年、69～70頁より、［　］は補語）	

5－2．人物紹介パネル

No.Ⅰ-人物P1	柳本　通義（1857-1937年）
 1880年札幌農学校卒業（第１期生） 1896～1907年台湾総督府の技師 （殖産部拓殖課長、民政部殖産課長、専売局、恒春庁長）	札幌農学校では第１期生としてW．S．クラークから直接講義を受けた。卒業後、北海道庁技師として殖民地区画撰定事業に携わった。 台湾総督府設置と同時に技師に任ぜられ、当初は対先住民政策を担当して「蕃地取調方法調査委員」を務め、先住民支配の拠点となる撫墾署を巡見した。その後、長期にわたり樟脳専売制度の準備・施行・確立に中心的役割を果たした。最後は、恒春庁の地方長官を務め、離台した。 樟脳は、クスノキから蒸留製造し、防虫剤やセルロイドの原料となった。日本政府は樟脳産業を台湾植民地経営の基軸に据えた。

No. Ⅰ-人物Ｐ2	藤根　吉春（1864-1941年）
 1889年札幌農学校卒業（第８期生） 1895～1915年台湾総督府の技師 （台南県殖産課長、農事試験場長・主事、殖産局農務課）	畜産学を専攻し、卒業論文として「牧草論」を提出した。卒業後は、北海道庁に就職し、真駒内種畜場などに勤務した。 同期の横山壮次郎の推薦で台湾に渡り、当初は殖民地選定のため、横山と手分けをして各地を調査した。その後､台南地方の農政実務を担当し､さらに農事試験場長・主事となり機構整備を行なった。試験場で農村子弟を対象に農事講習を開催するなど、農村教育を謀った。地方農会を束ねる農友会会頭・副会頭として農業指導・奨励を推し進めた。 元総督府官吏の招請に応じ、郷里の岩手県立農学校長となった。
No. Ⅰ-人物Ｐ3	横山　壮次郎（1868-1909年）
 1889年札幌農学校卒業（第８期生） 1895～1906年台湾総督府の技師 （台北県農務課長、台湾樟脳局、殖産局農商課長、臨時台湾糖務局糖務課長）	Ｈ.Ｅ.ストックブリッジに地質学を学び､“Geology of Environs of the Ishikari Plain”（石狩原野近傍ノ地質ヲ論ズ）を卒業論文とした。卒業後、北海道庁で地質調査に従事し、札幌農学校助教授として地質学を講じた。 横山は最初に渡台した卒業生であった。台湾では農事試験場創設・整備､農産物種苗の輸入､家畜の品種改良、果樹栽培奨励など、台湾農政全般の実務を担当した。特に、新渡戸稲造赴任後は、その片腕として台湾製糖業の改良・振興に当たった。 台湾での業績が高く評価され、奉天農事試験場長へ招聘された。
No. Ⅰ-人物Ｐ4	十川　嘉太郎（1868-1938年）
 1892年札幌農学校工学科卒業（工学科第２期生） 1897～1915年台湾総督府の技師 （臨時台湾基隆築港局工務課、土木部工務課、臨時台湾総督府工事部工務課）	札幌農学校工学科で廣井勇に学んだ。卒業後、北海道庁技手となり、函館区水道事務所にも勤めた。 台湾総督府の技師として赴任後、1899年から基隆築港に従事し、鉄脚仮桟橋などを建築した。基隆港は、現在に至るまで台湾の海の玄関口となっている。また、1901年には台湾神宮建設に関連し、参道に台湾初の近代的橋梁となった明治橋を建設した。そのほか、各地の河川治水工事や水道敷設工事を担当した。 離台して、山口県長府に帰郷した。

No. Ⅰ−人物Ｐ5	新渡戸　稲造（1862−1933年）
 1881年札幌農学校卒業（第２期生） 1901～1904年台湾総督府の技師･官僚（殖産局長心得、臨時台湾糖務局長、農事試験場長）	第２期生として卒業し、アメリカ・ドイツに留学後、札幌農学校教授となり農業史・殖民史・農政学などの講義を担当した。 台湾総督府民政局長官後藤新平の招聘に応じ渡台した。「糖業改良意見書」を提出して台湾製糖業の振興策を建策した。新渡戸は改良サトウキビ種苗輸入、製糖業施設の整備など、製糖業が台湾の基幹産業となる基礎を築いた。離台後も嘱託等として台湾植民地経営に深く関わった。 その後、京都・東京帝国大学の教授となり植民政策学を講じた。また、1906年には植民政策の論文で法学博士の学位を得た。
No. Ⅰ−人物Ｐ6	長崎　常（1865−1939年）
 1889年札幌農学校卒業（第８期生） 1906～1929年台湾総督府の技師（殖産局農商課・農務課）	佐藤昌介に農業経済学を学び、卒業論文「殖民外論」を提出した。卒業後は各地の農学校教長や農事試験場技師を務めた。 台湾総督府では、同期の横山壮次郎の後任として、殖産・農政実務の中枢を担った。特に米増産事業には力を入れ、藤根吉春が米種改良への「内地種」（日本産）導入を唱えたのに対し、長崎は「在来種」（台湾産）改良を主張し、1910年代の米増産方針を主導した。また、ヨーロッパの専売制や農業政策に関する専門書の日本語翻訳を刊行した。 退職後も総督府嘱託を務め、離台後は福岡県小倉に帰郷した。
No. Ⅰ−人物Ｐ7	東郷　實（1881−1959年）
 1905年札幌農学校卒業（第22期生） 1906～1923年台湾総督府の技師（彰化庁、殖産局農務課、台北庁、総督官房調査課長）	札幌農学校で農業経済学を専攻し、卒業論文「農業殖民論」を提出した（1906年に『日本植民論』として刊行、「台湾植民」にも言及）。 地方・中央の農務関係技師を務め、ドイツ内国植民政策などを参考に、台湾への「母国農民移植」（日本人移民）政策を主張したが、必ずしも総督府の政策とは一致しなかった。最後は総督官房官房調査課長の要職に昇った。『台湾農業殖民論』（1914年）などの植民学関係著書も多い。 離台後、立憲政友会などに所属して衆議院議員を務め、公職追放の期間を除き、戦後まで農業政策通の代議士として重きをなした。

No. Ⅰ−人物Ｐ８	色部　米作（1882−1942年）
 1906年札幌農学校卒業（第23期生） 1906～1929年台湾総督府の技師 （台南庁、嘉義庁、殖産局農務課長事務取扱・糖務課・特産課、大南庄・後里庄・東部蔗苗養成所長）	農業経済学を専攻し、卒業論文「農業倉庫論」を提出した。卒業後すぐに渡台した。 地方庁の技師を長く務め、一貫してサトウキビ生産に携わった。また、卒業論文でも論じた「農業倉庫」（農産物の品質改善・市況調整のための共同的貯蔵機関）が、台湾の生産者にとって必要であり、主要産物である米・茶などに有効であることを主張した。「農業倉庫」は、後に奨励施設となり、地方農会などが設置した。 退職後、南洋興発株式会社専務取締役に就任しサイパンに赴任した。
No. Ⅱ−人物Ｐ１	芳賀　鍬五郎（1873−1931年）
 1903年札幌農学校卒業（第20期生） 1906～1920年台湾総督府の技師 （殖産局農商課、園芸試験場主任、苗圃、林業試験場）	農学を専攻し、「爪哇薯の各位置に於ける芽と生産との関係」を卒業論文として提出した。卒業後、アメリカのミズーリ植物園、イギリス王立キュー植物園で園芸学の研修を受けた。 台湾総督府技師として、園芸試験場の創設に携わるなど園芸分野の責任者を長く務めた。バナナ、パイナップル、レモンなどの果樹をはじめ、コーヒー、カカオ、キャッサバといった熱帯産作物の調査・栽培・生産を手掛けた。 晩年は、東京女子大学講師などを務めた。
No. Ⅱ−人物Ｐ２	長嶺　林三郎（1875−1915年）
 1900年札幌農学校卒業（第18期生） 1906～1915年台湾総督府の技師 （恒春庁種畜場主幹、台東庁、殖産局農商課、農事試験場、種畜場主任、熱帯植物殖育場）	橋本左五郎に師事して畜産学を専攻し、「肉牛肥満論」を卒業論文として提出した。卒業後、研究生を経て、橋本教授の下で助教授・農場畜産係主任を務めた。 畜牛改良事業担当として渡台し、技師として恒春の種畜場の設立・経営に長く携わった。海外畜産視察を基に、インド種牛を移入して台湾畜牛に交配し、大きな成果を上げた。そのほか、綿羊の輸入、牧草の改良に当たった。 道半ばで早世し、後輩の柳川秀興（東北帝国大学農科大学1909年卒業）が台湾畜産業の牽引役を引き継いだ。

No. Ⅱ−人物Ｐ3	金子　昌太郎（1876−？年）
 1904年札幌農学校卒業（第21期生） 1907～1936年台湾総督府の技師 （臨時台湾糖務局、糖業試験場、大南庄・後里庄蔗苗養成所、中央研究所農業部糖業科長）	農学を専攻し「農場ノ労働」を卒業論文として提出した。渡台前に、『新編桑及蚕』（1905年）を共著刊行した。 台湾総督府では、病害に対する抵抗力の強い甘蔗（サトウキビ）品種を育成するため、甘蔗の育種学研究・実験に携わった。著書に『甘蔗農学』（1912年）がある。総督府離任後は一時離台したが、その後、明治製糖株式会社顧問として再渡台した。 1958年、82歳にして「台湾特に季節風看天田地帯に於ける甘蔗栽培に関する試験研究」で農学博士号を取得した。
No. Ⅱ−人物Ｐ4	磯　永吉（1886−1972年）
 1911年東北帝国大学農科大学卒業 1912～1957年台湾総督府の技師、大学教授（台中庁、農事試験場種芸部長、中央研究所農業部種芸科長、農業試験所長、台北帝国大学教授）	農学を専攻し、卒業論文「小麦ノ冬枯ニ関スル研究」を提出した。 卒業後渡台し、農事試験場技手からスタートした。イネの品種改良に一貫して携わり、主に日本産種（ジャポニカ米）の品種改良を手掛け、台湾の風土に適した優良品種の開発を行なった。1927年には「台中65号」の開発に成功し、「蓬莱米」（品種改良した日本産種の総称）の父と呼ばれた。戦後も台湾に在住し、「蓬莱米」普及に努めた。 帰国後の1961年、「亜熱帯における稲の育種に関する研究」で日本学士院賞を受賞した。
No. Ⅱ−人物Ｐ5	素木　得一（1882−1970年）
 1906年札幌農学校卒業（第23期生） 1907～1947年台湾総督府の技師、大学教授（農事試験場昆虫部長、中央研究所応用動物科長、台北帝国大学教授・理農学部長）	松村松年に師事して昆虫学を専攻し、卒業論文「本邦ニ於ケル苹樹害虫ニ就テ」を提出した。卒業後、札幌農学校助教授を経て、渡台した。 台湾総督府農事試験場昆虫部の技師として台湾産昆虫の調査と害虫駆除に当たった。特に害虫駆除のためにその天敵を移入・利用する方法を試み、成果を上げた。また、総督府博物館の運営に関わり、後に台北帝国大学理農学部教授・学部長を務めた。台湾特有種「フトオアゲハ」を発見し、『害虫・益虫』、『昆虫学辞典』などを著した。 戦後、帰国し、琉球・奄美地方の昆虫調査などを行なった。

No. Ⅱ−人物Ｐ6	石田　昌人（1876−1940年）
 1897年札幌農学校農芸伝習科卒業 1907～1928年台湾総督府の技手･技師 （糖業試験場、殖産局糖務課、大南庄・後里庄蔗病養成所、中央研究所農業部応用動物科）	札幌農学校の実業教育コースである農芸伝習科を卒業した。松村松年教授の下、雇・嘱託として昆虫学研究室スタッフとなり、農芸科で昆虫学を教えた。後に熊本農学校教諭に転じた。 台湾総督府では嘱託・技手・技師と昇任した叩き上げの技術者であった。甘蔗（サトウキビ）をはじめとする作物の害虫駆除に関わった。害虫駆除のための益虫移入に関する調査報告書などを作成した。 離台後、『昆虫学術語辞典』を編纂した。特に総翅目（アザミウマ目）の専門家であった。
No. Ⅱ−人物Ｐ7	三宅　勉（1880−1972年）
 1904年札幌農学校卒業（第21期生） 1910～1940年台湾総督府の技師 （糖業試験場、大南庄・後里庄蔗苗養成所、中央研究所農業部長事務取扱・植物病理科長）	宮部金吾に師事して植物病理学を専攻し､卒業論文｢桑樹枝条枯死ニ関スル研究」を提出した。卒業後、樺太庁嘱託として樺太植物を調査し、宮部と共著で『樺太植物誌』（1915年）を著した。 渡台後、甘蔗（サトウキビ）の植物病理学研究・調査に従事し、露菌病、黄條病、赤腐病、根腐病、萎黄病、白條病など甘蔗のさまざまな病害の調査報告を行なった。その他、バナナ・パイナップル・蜜柑などの果樹病害についても研究した。 離台後は、東京で過ごした。
No. Ⅱ−人物Ｐ8	鈴木　力治（1879−1915年）
 1906年札幌農学校卒業（第23期生） 1906～1909年台湾総督府の技師 （農事試験場植物病理部）	宮部金吾に師事して植物病理学を専攻し、｢核ノ単双ヨリ見タル銹菌ノ生活史ニ関スル研究」を卒業論文として提出した。 卒業後渡台し、農事試験場技師として、台湾の栽培作物の病害の全容解明に務めた。上司の川上瀧彌と共に『台湾農作物病害目録』其一（1908年）を刊行するに際し、穀類・蔬菜・果樹・牧草など甘蔗以外の病原菌標本のほとんどは鈴木が採集した。 離台後、大連で農事・園芸事業に携わったが急逝した。学生時代から文筆に秀で、詩誌『緑熱』を発行し、また「象骨」の俳号も名乗った。

No. Ⅲ−人物Ｐ1	渋谷　紀三郎（1883−？年）
 1908年東北帝国大学農科大学卒業 1909～1946年大学教授 （農事試験場農芸化学部、中央研究所農業部長・農芸化学科長、台北帝国大学教授）	農芸化学を専攻し、卒業論文「醸造用麦芽ニ就テ」を提出した。農科大学副手などを経て渡台した。 台湾総督府では、試験場や研究所の農芸化学部門の中心として、主に土壌分析や土地改良を担った。「台湾に於ける赤色土の化学的研究」で北海道帝国大学から農学博士号を受け、1929年に台北帝国大学教授となり、理農学部農芸化学第一講座（土壌肥料学）を担当した。大島金太郎逝去後、中央研究所農業部長のポストを引き継いだ。 1943年に台湾拓殖株式会社に転じた。
No. Ⅲ−人物Ｐ2	吉川　藤左衛門（1880−1923年）
 1907年札幌農学校卒業（第24期生） 1912～1923年台湾総督府の技師 （検糖所長、中央研究所高雄検糖支所長、糖務課、糖業試験場）	農芸化学を専攻し、卒業論文「燕麦之利用」を提出した。卒業後、帝大に昇格した母校東北帝国大学農科大学の助手・助教授を務め、オートミール製造などの研究を行なった。 台湾総督府が検糖所を開設するに当たって、所長として赴任した。イギリス・フランス・アメリカ・キューバの糖業・検糖技術を視察・調査し、糖度検定に光学精密機械を導入した。在任中は常に台湾南部の高雄にあった検糖所において検糖事業に従事し、台湾の主要産業である糖業を下支えした。
No. Ⅲ−人物Ｐ3	山田　秀雄（1874−1925年）
 1898年札幌農学校卒業（第16期生） 1908～1925年台湾総督府の技師 （殖産局農務課、茶樹栽培試験場主任、中央研究所平鎮茶業試験支所長）	農芸化学を専攻し、吉井豊造教授に師事して、卒業論文「淘汰分析に就て」を提出した。卒業後、神戸中学校教諭、綾部蚕業伝習所長、阿蘇農学校長を務め、農業教育と地方農事指導に従事した。 渡台して台湾総督府で殖産事業の任に当たり、その後、一貫して茶樹栽培試験・改良・指導を行ない、インド・インドネシアなどの世界の製茶業を調査した。特に半発酵茶種である青茶（烏龍茶、包種茶など）の専門家として、台湾製茶業の盛況に資した。これら青茶は、現在も台湾の主要産品となっている。

No. Ⅲ−人物Ｐ4	大島　金太郎（1871−1934年）
 1893年札幌農学校卒業（第11期生） 1918～1934年台湾総督府の技師、大学教授（殖産局農務課、中央研究所農業部長、高等農林学校長、台北帝国大学理農学部長／初代）	農芸化学を専攻し、吉井豊造教授に師事して、卒業論文「塩素及苦土の大麻繊維に及す試験成績」を提出した。アメリカ・ドイツ留学を経て札幌農学校教授となった。また、北海道農事試験場長を長く兼任した。 1918年に台湾総督府から技師として招請され、農業関係技師の統括的役割を果たし、総督府・台北帝大の北大閥の中心人物であった。中央研究所や台北帝国大学の設立に中心的に関わり、設立後も統括職に就いて行政的手腕を大いに発揮した。研究業績は土壌分析や食品栄養分析など広範にわたり、日本の農芸化学の草分けのひとりであった。
No. Ⅲ−人物Ｐ5	濱口　榮次郎（1882−1970年）
 1916年東北帝国大学農科大学卒業 1917～1947年製糖会社技師、大学教授（東洋製糖株式会社、同南靖製糖所、台北帝国大学教授、同南方資源科学研究所長）	農芸化学を専攻し、卒業論文“The bacteriological Investigations on the Spoilage of boiled Rice”を提出した。 卒業後に渡台し、東洋製糖株式会社で技師を務めた。1928年に台北帝国大学助教授に転任、教授に昇進して理農学部製糖化学講座を担当し、戦時中には同大学南方資源科学研究所長も兼任した。1943年に「糖蜜の清浄に就て（甘蔗糖蜜より分離せるシンゲナイトに就て）」で北海道帝国大学から農学博士号を受けた。 戦後は兵庫農科大学教授を務めた。製糖化学の権威であった。
No. Ⅲ−人物Ｐ6	山根　甚信（1889−1972年）
 1913年東北帝国大学農科大学卒業 1931～1948年大学教授 （台北帝国大学教授、同大学理農学部長、国立台湾大学農学院教授）	畜産学を専攻し、卒業後、東北帝国大学農科大学・北海道帝国大学農学部の助手・助教授として、馬の精液と精虫の基礎的研究を行なった。 1931年台北帝国大学教授になり、理農学部畜産学講座を担当した。その後、第３代理農学部長も務め、熱帯畜産学講座を担当した。家畜の比較形態学・繁殖学を研究し、特に人工授精技術を導入して、その衛生・繁殖・改良を手掛けた。終戦後は台北帝国大学の接収に立ち会い、引き続き国立台湾大学農学院教授を務めた。 帰国して広島大学水畜産学部長、広島県立農業短期大学長を歴任した。

No. Ⅲ−人物Ｐ7	松本　巍（1891−1968年）
 1916年東北帝国大学農科大学卒業 1926～1967年大学教授 （台北帝国大学教授、国立台湾大学農学院教授、台湾糖業試験場顧問）	植物病理学を専攻し、宮部金吾に師事した。卒業後、アメリカ・イギリスに留学し、盛岡高等農林学校教授となった。1924年に「Rhizoctonia Solani の生理学的研究」で北海道帝国大学から農学博士号を受けた。 1928年に台北帝国大学理農学部教授となり、植物病理学講座を担当した。植物ウィルス学からのアプローチで、イネ・サトウキビ・タバコなどの農作物病害を研究し、熱帯植物病理学を確立した。 終戦の1945年以降も、国立台湾大学関係者からの慰留に応じて教授として留まり、退職後も病で帰国するまで台湾で研究を続けた。
No. Ⅲ−人物Ｐ8	羅　宗洛（1898−1978年）
 1925年北海道帝国大学農学部卒業 1945～1946年台北帝国大学の接収を担当 （中国政府教育部台湾特派員、台湾区復員輔導委員会主任委員、国立台湾大学校長／初代）	中国浙江省に生まれた。1922年に北海道帝国大学農学部に進学し、植物生理学を専攻した。坂村徹に師事して大学院に進学し、1930年に「高等植物根系ニヨル「アムモニヤ」及硝酸ノ吸収ニ就テ」で農学博士号を取得した。中山大学（広東）、暨南大学（上海）、中央大学（南京）、浙江大学などの教授を歴任し、中国中央研究院植物研究所長となった。 1945年の終戦に伴い、台北帝国大学接収の任に当たり、国立台湾大学校長（初代、1945年11月～46年７月）となった。その後、大陸に戻り、中国科学院植物生理研究所長などを務めた。

備考　肖像写真は、下記のとおりである。
⑴　大学文書館所蔵写真：Ⅰ−人物Ｐ1、Ⅰ−人物Ｐ5、Ⅰ−人物Ｐ6、Ⅰ−人物Ｐ7、Ⅱ−人物Ｐ1、Ⅱ−人物Ｐ3、Ⅱ−人物Ｐ4、Ⅱ−人物Ｐ5、Ⅱ−人物Ｐ7、Ⅱ−人物Ｐ8、Ⅲ−人物Ｐ1、Ⅲ−人物Ｐ2、Ⅲ−人物Ｐ3、Ⅲ−人物Ｐ4、Ⅲ−人物Ｐ6
⑵　附属図書館所蔵写真：Ⅰ−人物Ｐ3（ブルックス24）
⑶　植物園所蔵写真：Ⅲ−人物Ｐ7（宮部0482−16）、Ⅲ−人物Ｐ8（宮部0478−02）
⑷　刊行物口絵：Ⅰ−人物Ｐ2・Ⅰ−人物Ｐ4・Ⅰ−人物Ｐ8・Ⅱ−人物Ｐ2・Ⅱ−人物Ｐ6（『台湾農事報』口絵）、Ⅲ−人物Ｐ5（『台北帝国大学理農学部創立六十年記念』口絵）、Ⅰ−人物Ｐ4（『十川さんの面影』口絵）

６．特設展示「《特集》川上瀧彌」

６－１．パネル（人物紹介・略年譜）

川上　瀧彌（1871–1915年）

1900年札幌農学校卒業（第18期生）
1903～1915年　台湾総督府の技師
（殖産局農商課・農務課、臨時台湾糖務局、
農事試験場植物病理部長、博物館長）

荘内中学校時代から植物標本収集に熱中し、宮部金吾に示教を仰いだ。進学後、宮部教授に師事し、在学中には阿寒湖を調査し「毬藻（マリモ）」を命名した。卒業論文は「稲ノいもち病ニ就テノ研究」であった。

台湾総督府では、有用植物調査事業に従事し、高山・島嶼を踏破して、『台湾植物目録』（1910年）を刊行した。また、台湾総督府博物館（現在の国立台湾博物館）の初代館長を務め、自然標本や歴史文化財、先住民族資料などの展示品の収集・配置を指導した。博物館創設準備と開館、体制整備に大きな役割を果たしたが、急逝した。

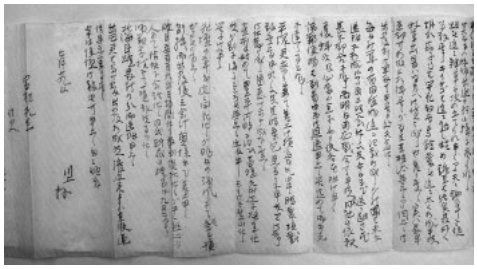
川上瀧彌の略年譜～渡台前～	
1871年	１月24日、山形県飽海郡松嶺町生まれ
1891年	９月、札幌農学校予科入学
1896年	７月、札幌農学校予科を卒業。９月、同校本科へ進学
1898年	７月、北海道千嶋国国後択捉色丹三島森林植物調査嘱託 ／北海道庁（～1901年６月まで）
1900年	７月、北海道主要林木ノ識別法・模式図・効用及分布調査嘱託 ／北海道庁（～1901年６月まで）
	７月、札幌農学校本科を卒業（第18期生、植物病理学専攻）
1901年	６月、熊本県立熊本農業学校教諭（～1903年９月まで）。勤務の傍ら、桐樹天狗巣病や七島藺鼈甲病の調査・研究にあたる。
1902年	１月、森廣（札幌農学校第19期生）との共著で『はな』（札幌農学校学藝会蔵版、発行：裳華房）を上梓
	３月、『北海道森林植物図説』（宮部金吾閲、北海道庁蔵版、発行：裳華房）を上梓

川上瀧彌の略年譜～渡台後～	
1903年	10月、任台湾総督府嘱託（農事に関する事務嘱託）、 台湾総督府民政部殖産局勤務、 台中農事試験場長心得（～1903年11月廃場により帰府）
1904年	1月、任台湾総督府技師、 台湾総督府民政部殖産局農商課勤務（農務課勤務：1909年～） 7月、［兼任］臨時台湾糖務局技師（～1911年10月廃局まで）
1908年	7月、［兼任］台湾総督府農事試験場技師（植物病理部長） ［兼務］殖産局博物館長（殖産局附属博物館長：1912年～）
1915年	8月21日、台北にて逝去（享年44歳）

6－2．展示資料目録・資料画像

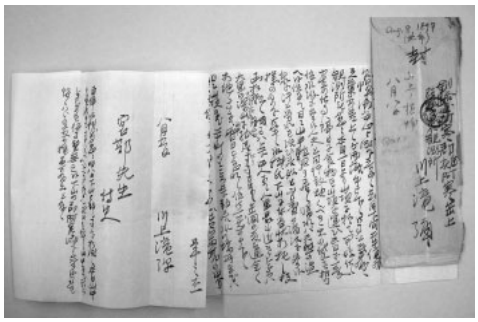
No. Kawakami-1	宮部金吾宛て川上瀧彌書簡（1893年7月29日、札幌）
	封書／大学文書館蔵（宮部金吾旧蔵書簡）

川上は、荘内中学校生徒から宮部金吾に師事していた。札幌農学校予科3年級になる夏休み、宮部夫妻が東京に滞在している間、川上は宮部邸の留守を預かった。この間、東京の宮部へ頻繁に手紙を出している。この手紙でも、キイチゴが熟し、エンドウが結実し、キュウリ・ナスが開花し、ジャガイモが育っている庭の様子、宮部門下生の来訪、豊平川で植物採集したことや藻岩山登山の予定などを伝えている。



No. Kawakami-2	宮部金吾宛て川上瀧彌書簡（1897年8月5日、雌阿寒岳）
	封書／大学文書館蔵（宮部金吾旧蔵書簡）

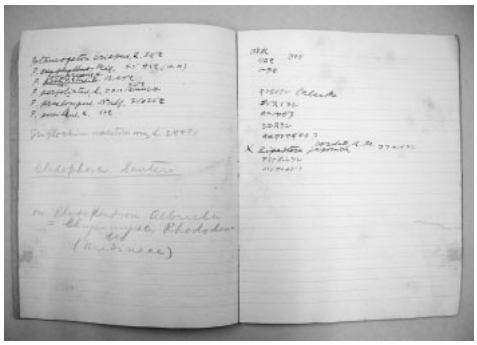
川上は、札幌農学校2年級の1897年夏に雌阿寒岳の観測所の荷役労動のアルバイトをしながら、植物採集を行なった。「小生の仕事ハ隔日に食物を山頂に運ひ、三日に一度位水汲に参候。人夫と同行致、炊くべき米の袋を携へ候位にて、日々山中駈廻り居候。帰れバ天然の温泉に汗と労れを洗ひ居、殆と官費の湯治に参候様のものに御坐候」と東京の宮部に伝え、調査した植生などを詳細に報告している。追文に「下山の節、阿寒湖に参候事を得候ハヾ多少の採収可有之と存候」とあり、この後、阿寒湖の調査を行なっている。



No. Kawakami-3	川上瀧彌フィールドノート「釧路みやげ」（1897年）

ノート／大学文書館蔵（植物学教室旧蔵資料）

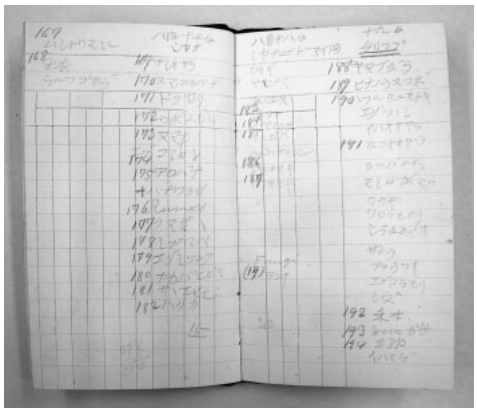
川上は、1897年８～９月にアルバイトを兼ねて、雌阿寒岳・雄阿寒岳・阿寒湖・厚岸・霧多布・釧路などの植物採集調査旅行を行なった。資料はその際に調査・採集した植物名を記したフィールドノートである。川上は、８月23日に阿寒湖を調査し、湖底に毬状になった緑藻が列を成しているのを発見し、「毬藻（マリモ）」と名付けた。左ページ中央の下線を引いた青字“Cladophora Sauteri”が「マリモ」を指している。川上は、翌1898年２月発刊の『学芸会雑誌』第25号に、「阿寒湖採藻記」としてこのときの調査を報告している。



No. Kawakami-4	川上瀧彌の千島調査野帳（1898年）

野帳／大学文書館蔵（植物学教室旧蔵資料）

川上は、本科３年級になる1898年夏、北海道庁の嘱託を受けて、千島列島の択捉島森林植物調査を50日以上にわたって行なった。野帳には、調査した植物名を記している。８月17日にはシャナ（紗那）、18日にはトーマイ、19日にはチリップ（散布）山と、択捉島北部に位置する半島を調査している。



No. Kawakami-5	宮部金吾宛て川上瀧彌書簡（1898年８月19日、択捉島）

封書／大学文書館蔵（植物学教室旧蔵資料）

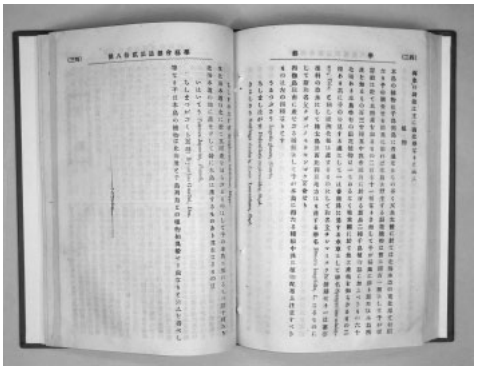
択捉島のチリップ山（1,587m）探検の様子を伝えている。「路と申候ハ名のみにて三百尺、二百尺位の絶壁の中部を横きり候ところにて、下ハ底も知らぬ深淵にて岸のむ波の音さへ物凄き事に候。上を見れバ赤色の屏風の如き絶壁に有之、半歩を誤れバ此世の人に有之まじく候」という難所を踏破して、植物調査を行なったが、「植物ハ余りに少く失望仕り」との結果であった。

No. Kawakami-6	川上瀧彌「択捉島の森林樹種及其分布」（1899年）

刊行物／大学文書館蔵

1898年夏の択捉島調査の結果を、川上は『学芸会雑誌』に２回にわたって掲載した（第28，30号、1899年２，８月）。日本では植生が確認されていなかった植物２種を発見し、それぞれ「チシマミクリ」、「ナガバノモウセンゴケ」と和名称を付けている。

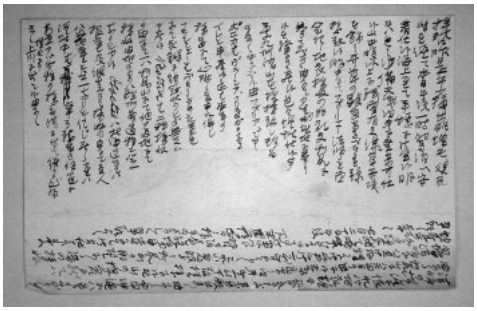
（『学芸会雑誌』第28号）



No. Kawakami-7	宮部金吾宛て川上瀧彌筆ハガキ（1899年７月20日、利尻島）

郵便葉書／大学文書館蔵（宮部金吾旧蔵書簡）

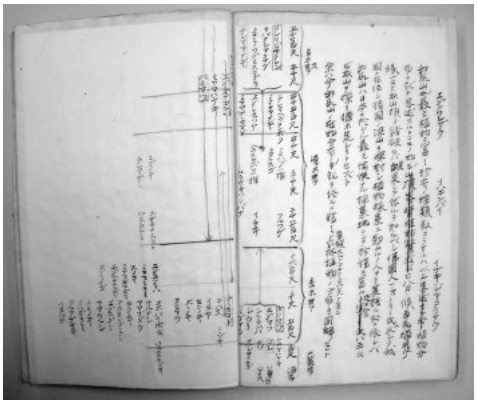
川上は、４年級になる夏休みには、1899年７月19日に札幌を出発し、７月23日から９月４日にかけて利尻島の植物調査修学旅行を行なった。ハガキには、利尻島へ向かう船中で、植物採集家として著名なフランス人神父U.フォーリー（Urbain Faurie, 1847–1915）と会い、植物談義に花を咲かせた様子を記している（「船中にてフォーリエー法師と面会仕候。地衣採収の為、礼文利尻に参るべき由にて、小生の此地に参り候を驚き居候。色々談話仕候」）。船中からの利尻富士スケッチも添えている。



No. Kawakami-8	川上瀧彌「修学旅行報告　利尻嶋植物分布ノ状態」（1900年２月）

文書／大学文書館蔵（札幌農学校簿書671）

川上は、1899年夏の利尻島植物調査修学旅行について、翌1900年２月に札幌農学校へ報告書を提出した。川上は、利尻島の顕花植物289種、シダ類17種を調査したと記録している。この旅行中に邂逅したU．フォーリー神父とは、生涯を通じて親交を深めた。



No. Kawakami-9	川上瀧彌が渡台直前に宮部金吾に宛てたハガキ（1903年９月２日付、遠江）

絵葉書／大学文書館蔵（宮部金吾旧蔵書簡）

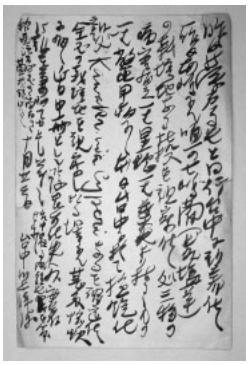
川上は、熊本赴任中、「桐樹萎縮病」、「七島藺鼈甲病」を調査し、往復書簡により宮部金吾教授の指導を受けながら、その病原菌を追究していた。1902年６月には遂に前者の病原菌（命名：グレオスポリウム・カワカミィ）を、12月には後者の病原菌（命名：カワカミヤ・シペリ）を発見した。本書簡では、渡台直前に、日本国内中の七島藺（カヤツリグサ科、畳・草履等の材料となる）の栽培地を視察したことなど、宮部教授に報告している。

「八月三十日夜半大分県別府出帆ノ便船ニ乗リ四国ノ各港ヲ経卅一日夜半神戸ニ着（略）二日早朝馬車ニテ五里許リ濱名湖ノ引佐郡役所ニ参リ七嶋藺（此地ニテハ琉球藺ト云フ）病害ノ調査ヲ試ミ候。当地ニテモ鼈甲病多ク方言アカト申候。栽培中々盛ニテ面白キ材料ヲ多ク集メ申候。之ニテ日本中ノ七嶋藺栽培地ヲ皆見タルワケニ候。私費ヲ擲候トモ此研究タケハ渡台前ニ発表致度候……」

No. Kawakami-10	川上瀧彌が渡台直後に宮部金吾に宛てたハガキ（1903年10月23日付、台中）

郵便葉書／大学文書館蔵（宮部金吾旧蔵書簡）

渡台直後、川上は七島藺の栽培地を視察して、病気に罹った七島藺を採集し、検鏡を行なった。熊本で研究していた「七島藺鼈甲病」が新領地の台湾でも確かめられた喜びを、川上は宮部金吾教授に報告した。



「昨日新渡戸局長と同行、台中に到着仕候。一昨日本嶋にて唯一の七嶋藺（土名塩草）の栽培地なる北投を視察致候処三種の病害有之　一は黒穂、一は葉先より枯るゝもの、一は鼈甲病に候。本日台中に於て検鏡仕候処、Kawakami Cyperi なるを確定仕候。之にて全国の栽培地を視察したる訳にて甚だ愉快に存候……」

No. Kawakami-11	川上瀧彌・鈴木力治『台湾農作物病害目録（其一）』（1908年９月）

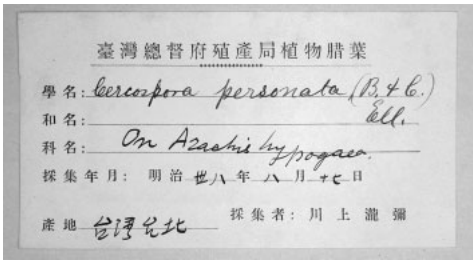
刊行物／大学文書館蔵（植物学教室旧蔵論文別刷コレクション）

台湾総督府農事試験場植物病理部紀要第１号として出版された。34～35ページには、「落花生葉渋病」が登録されている。川上は台北庁で、鈴木力治（札幌農学校第23期生、台湾総督府技師）は基隆・宜蘭・新竹・苗栗・台中・南投・斗六庁で、台北・台中地域で病原菌標本を採集していることがわかる。

No. Kawakami-12	台湾総督府殖産局植物腊葉の標本ラベル（1905年８月）

物品／大学文書館蔵（宮部金吾旧蔵書簡）

1906年８月18日付け宮部金吾宛て川上瀧彌書簡（封書）の中に、川上が８月17日に台北で採集した「落花生葉渋病」（病原菌：Cerospora personata (B. et C.)Ell.）の標本と共に同封されていたラベル。
川上は宮部教授に同標本の検定を依頼した。



No. Kawakami-13	兼務多忙を伝える宮部金吾宛て川上瀧彌書簡（1906年８月18日付、台北）

封書／大学文書館蔵（宮部金吾旧蔵書簡）

川上は台湾総督府内での兼務が非常に多く、多忙をきわめた。書簡では、本務である「有用植物調査」が、本年度は台湾先住民地域以外の平地・山地の調査を終えること、来年度には「新高山」（現称：玉山）の探検調査を計画中であること等も伝えている。

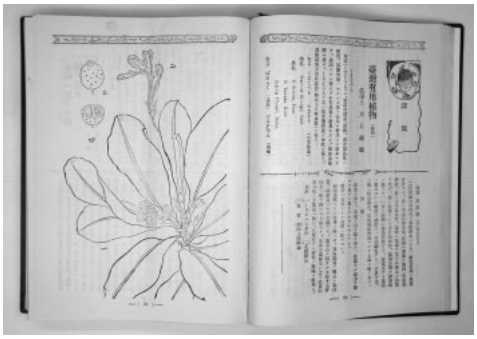
「…小生昨今ハ左の通りの勤務にて気体二つありても足らぬ位にて其為めに専修の事も思ふ通りに出来兼ね候。併し研究事業を忘却ハ不致ハ繁忙の内に研究を続け居候間御安心下被度候。

殖産局農商課（本務）：有用植物、病虫害調査主任
兼務：糖務局　甘蔗病害／殖産局農事試験場　病理部主任、講習生植物学講師／国語学校農業科　作物生理、病虫害講師／総務局学務課　公学校農業教科書編纂…」

No. Kawakami-14	川上瀧彌「台湾有用植物」（1908年５月）

刊行物／附属図書館蔵（複製）

川上は、台湾総督府民政部殖産局農商務課技師として、有用植物調査事業を担当した。台湾に自生する植物を調査し、殖産に結び付けることが目的であった。植物採集調査に切情を傾ける川上には打って付けの仕事であり、台湾全島をくまなく踏査し、調査結果を『台湾農事報』に連載していった。1910年３月には『台湾植物目録』を編纂し、2,368種の植物を掲載した。また、これらの調査は、野生ゴムを栽培する「護謨苗圃」設置や、マラリアの特効薬キニーネを産するキナノキの試作などにつながっていった。



（『台湾農事報』第17号）

No. Kawakami-15	川上瀧彌「台湾農業植物誌料」（1914年11月）

刊行物／附属図書館蔵（複製）

野生植物の調査に区切りを付けた後、次に川上は、台湾で栽培されている「日常衣食の料に供する農業植物」の調査を開始した。順次調査を続け、「台湾農業植物誌料」として連載する予定であったが、『台湾農事報』に２編を掲載したのみ（１編目は「蕃荔枝科」、２編目は「胡椒科」〔第103号、1915年６月〕）で川上は急逝してしまった。

（『台湾農事報』第96号）

No. Kawakami-16	宮部金吾宛て川上瀧彌筆ハガキ（1915年３月23日付、霧社）

絵葉書／大学文書館蔵（宮部金吾旧蔵書簡）

Cinchona（キナノキ、キニーネの原料）試植のため、台中州南投の台湾先住民地域「霧社」に居る近況を、川上は宮部教授に伝えた。文中の「長嶺君」とは、結核で急逝した長嶺林三郎（札幌農学校18期生、台湾総督府技師・種畜場主任）のこと。同級生であり、共にクリスチャンとして、台湾での生活を支え合った。

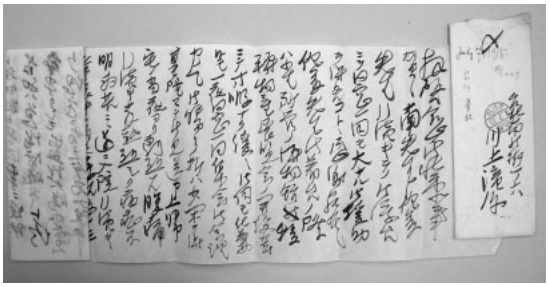
「Cinchona 試植ノ為南投蕃地霧社三十七百尺ノ処ニ参居候。此地ニハ「ムシャザクラ」白花ノ野生種有之候。蕃人ハ畑地ニ「ハラキ」ヲ植ヘ地力ノ恢復ヲ図リ居候。山中ノ朝華氏五十五度ニ候。長嶺君ノ永眠ハ誠ニ可惜、去二十日台北ニテ追悼式ヲ営ミ其夜出発南行致候」

No. Kawakami-17	宮部金吾宛て川上瀧彌書簡（1915年７月７日、台北）

封書／大学文書館蔵（宮部金吾旧蔵書簡）

1915年４月には南鷹次郎教授、６月には佐藤昌介学長が、札幌の母校から相次いで台湾を訪れた。このとき、川上は館長として博物館の展示準備に当たっていた。

「南先生佐藤先生引続キテノ御渡台ニテ同窓一同モ大ナル御援助ヲ得タルコト、感謝罷在候。佐藤先生御着台ノ際ハ小生所管ノ博物館移転物産展覧会ノ開設等ニテ寸暇ナク緩々御伺モ仕兼候モ、一夜同窓一同集会御会談申上候。御帰リノ折ハ少閑ヲ得、基隆マテ御見送申上、帰宅ノ当夜ヨリ激烈ナル腹痛引続発熱烈シク病気不明ノ苦ミ遂ニ入院」と、無理がたたって体調を崩した。これが、恩師宮部に宛てた最後の手紙となった。



No. Kawakami-18	国立台湾博物館「児玉・後藤銅像陳列室」リーフレット（日本語版、台湾語版）
	印刷物／大学文書館蔵

台湾総督府は、1915年に博物館建物を新設し、台湾領有統治に勲功のあった第４代総督児玉源太郎と民政局長官後藤新平を顕彰して「児玉総督及後藤民政長官記念館」と呼称した。当時、川上は館長として開館準備に奔走し、開館当日の８月21日に急逝した。かつて植民地為政者の名を冠していたこの博物館は、現在、国立台湾博物館となっている。川上は、その基盤を築いた初代館長として敬慕されている。

６－３．パネル目録・パネル写真

No. Kawakami-P１	〔人物紹介パネル〕川上瀧彌　＊
	大学文書館作成
No. Kawakami-P２	川上瀧彌の略年譜～渡台前～　＊
	大学文書館作成
No. Kawakami-P３	札幌農学校植物学教室メンバー（1899年６月５日）
	写真／植物園蔵（宮部金吾旧蔵写真0474-15）

後列左２番目から、川上瀧彌（第18期生）、山田玄太郎（第16期生）、半澤洵（第19期生）
前列左２番目から、宮部金吾教授、菊池幸次郎（第15期生）、西田藤次（第17期生）

No. Kawakami-P４	阿寒湖・利尻岳・択捉島沙那村
	戦前期絵葉書／大学文書館蔵（佐々保雄旧蔵資料）

No. Kawakami−Ｐ５	川上瀧彌の「マリモ」の命名

午後独木舟にし、岸に沿ふて採藻す。晶々たる湖面鏡の如く、一帯の針葉樹林湖崖を蔽ひ、白沙の岸細漣之を洗ひ、蘆荻［アシとフトイ］水辺に茂り、飛鳧［飛んでいるカモ］棲を其間に尋ね、萍藻［ウキクサとモ］湖面に梗を抽き艶花黄又白色、水清くして水底の鱗属皆数ふべく、四岐南北に隠顕し、東西に聳ゆる雌阿寒の噴烟雄阿寒の翠色、共に湖上に其影を倒映するの景、真に絶勝の名に背かざるを知る、予舟を浮萍多き処に留むれは、水蓼の白花櫂に砕けて飛ふこと雪の如し、水蓼長楕円の葉を浮べ、花の長さ約七尺、予其水下の状を知らんが為めに、水底を窺へは、各種の水草雑然として繁生し、小魚群泳して其間を過くるあり。奇観云ふ可からず、（略）水底毬円緑色の一奇藻大小羅列するあり、是れ緑色藻の一種 Cladophora Sauteri.にして、マリモ（毬藻）の和名を命す

（川上瀧彌「阿寒湖採藻記」『学芸会雑誌』第25号、1898年２月より、［　］は補語）

No. Kawakami−Ｐ６	札幌農学校第18期生卒業記念（1900年７月）

写真／植物園蔵（宮部金吾旧蔵写真0474−08）

川上瀧彌は前３列目左から６番目。
前列の教授陣は、左から、吉井豊造、南鷹次郎、佐藤昌介校長、宮部金吾、原十太、平野他喜松

No. Kawakami−Ｐ７	川上瀧彌「台湾への憧れ」（1903年１月）

兼々御願申上候台湾行の事、愈々新渡戸先生［新渡戸稲造、台湾総督府民政部殖産局長心得］も御帰朝の由に候間、［宮部金吾］先生より御話頂き度（略）小生南方を望み候希望ハ年来の素志にハ候へ共健康の点など懸念仕候ガ昨今ハ人の運命ハ到底計り知るべからざるもの故、死生の事ハ考るべきものにあらずと存候間、何地にても自分の乗て執るべき職務に居て勉強致度と存じ（略）新開地などの天産物調査或ハ只今の研究調査［桐樹萎縮病調査］の如きもの丶様なる仕事を致候職務に就き度候

（1903年１月２日付宮部金吾宛て川上瀧彌書簡より、［　］は補語）

No. Kawakami−P 8	川上瀧彌の略年譜～渡台後～＊／在台期における川上瀧彌の主な著作物

大学文書館作成

〔在台期における川上瀧彌の主な著作物〕
『柑橘病害論』（翻訳、1906年）、『農学校用植物生理学』（1906年）、
『台湾野生護謨樹』（1906年）、『甘蔗病害論』第一編・第二編（1908年）、
『台湾害虫駆除予防講習講義録』（長崎常・素木得一と共著、1909年）、
『台湾農作物病害目録』其一（鈴木力治と共著、1908年）、
『台湾植物目録』（1910年）、『椰子の葉蔭』（1915年）など

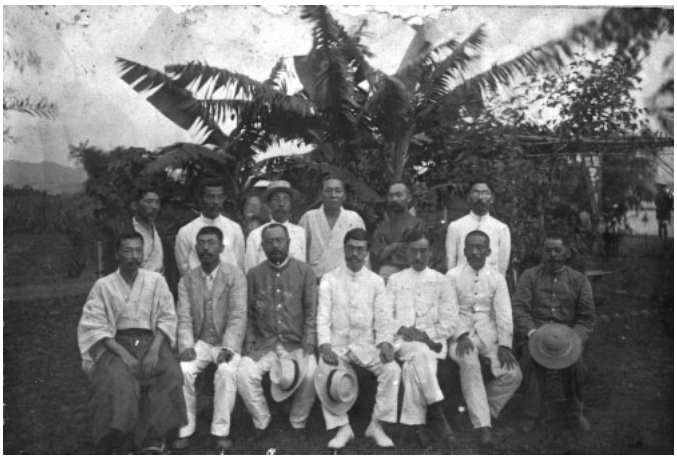
No. Kawakami−P 9	川上瀧彌「台北に赴任して」（1903年12月）

今度殖産局詰被命、不取敢本嶋の作物の植物学的調査を始め候事と相成（略）農事試験場も愈々［台湾総督府の］直轄唯一つと相成候間担任の見込にて病虫害研究の主任者たるべく当分農事講習に植物学教授致事と相成（略）去一日横山［壮次郎］氏と同行、附近のミカン園観察ニ参り候。病虫害中々に多くスカブ［Scab：黒星病］の害ハ恐ろしく候。外に被害多き一種の病害有之、之は研究を要すべき問題と存候（略）当地にハ植物学会の連中も有之候間、同志のものを促して博物学会を起し度一つ首動者となりて働き候積りに御坐候

（1903年12月４日付宮部金吾宛て川上瀧彌書簡、［　］は補語）

No. Kawakami−P 10	訪台した松村松年教授を歓迎して（1906年６月24日、台北）

写真／大学文書館蔵（佐藤政雄寄贈資料）



川上瀧彌は後列右２番目。
前列左３番目から、藤根吉春（第８期生、農事試験場長）、松村松年教授（第13期生）、柳本通義（第１期生、恒春庁長）

No. Kawakami−P 11	素木得一「川上瀧彌館長の大奮闘」

～博物館創設当時を顧みて～　館長川上瀧彌氏前館創始当時も又其後の移転開館当時も計画、陳列、指揮等に忙殺され寝台を館内に設備せしめて昼夜を分たず奮闘努力されたことは遂に過労の原因より陳列作業中に館内に仆れ再び立つ能はざるに至つた。移転開館を余す処僅かに数日にして其の完成を見ずして斃れられた館長の胸中を察すると共に館長自らの人柱となられ礎石愈々堅き本館を望むとき氏を知るもの誰か其の岩荘巍然たる玄関に立ちて涙なくして入る能はざるものがある。

（台湾総督府博物館『創立三十年記念論文集』1939年、379頁より）

No. Kawakami−Ｐ12	台湾総督府博物館

戦前期絵葉書／大学文書館蔵

No. Kawakami−Ｐ13	訪台した南鷹次郎教授を歓迎する札幌農学校同窓生たち（1915年４月30日）

写真／大学文書館蔵（作物学教室旧蔵資料）

撮影場所は、台北駅に近接した日本式旅館「梅屋敷」（現在は逸仙公園内に屋敷一部が移築されている）。南鷹次郎教授は、４月29日台湾総督府農事試験場を視察した。その際、台湾総督府技師となった教え子たちとの体重測定にも興じている。

前列左より、東郷實、芳賀鍬五郎、山田秀雄、小川運平、長崎常、南鷹次郎、藤根吉春、菊池捍、川上瀧彌

備考　⑴　＊印のパネルは、６−１.に詳細を掲載した。
　　⑵　引用した書簡には、適宜、句読点を付した。
　　⑶　引用資料中の差別的・蔑視的表現については、資料の歴史的な価値に鑑み、そのまま表記した。